

# 学校保健

茨城県学校保健会

第 69 巻

令和7年12月1日発行



## 未来を担う子どもたちのために —学校保健と薬剤師の役割—

茨城県学校保健会副会長 おてき あきら 樗木 昭

令和7年度より茨城県学校保健会副会長を拝命いたしました樗木 昭です。本誌の巻頭を飾る機会を頂戴しましたことに、心より感謝申し上げます。

学校は、言うまでもなく、子どもたちが学び、成長し、社会性を育む大切な教育と生活の場です。その環境が安全で健やかであることは、すべての教育活動の大前提となります。私たち学校薬剤師は、その中で「健康と安全を守る専門職」として、環境衛生管理から感染症対策、健康教育に至るまで、幅広い分野で関わってまいりました。

薬剤師は、学校の衛生環境を整える専門家として、感染症発生時の支援や情報共有、消毒・換気方法の助言などを通じて、子どもたちの健康を守る役割を担っています。同時に、医療機関や保健所、教育行政との連携を深めることで、地域全体の公衆衛生の向上にも寄与できていると考えています。

一方で、新型コロナウイルス感染症の流行は、学校保健の在り方を改めて見つめ直す契機となりました。二年余にわたる流行の波とウイルスの変異に対し、感染防止のために多くの学校が工夫を凝らしました。換気状況や空気環境の確認、衛生用品の適正使用などにおいて、私たち学校薬剤師が果たした役割は大きなものであったと感じております。新型コロナウイルス感染症への対応を通じて、過去の教訓を踏まえつつ、科学的根拠に基づいた「リスクに応じた柔軟な対応」への進化が求められることを、改めて実感いたしました。

また、現代社会においてももう一つ深刻な課題

が「薬物乱用」です。SNSを通じた情報拡散や違法ドラッグの形態変化により、若年層が安易に薬物へ接触してしまうリスクが高まっています。覚醒剤や大麻だけでなく、市販薬や処方薬の不適正使用も社会問題化しており、「身近な薬の誤った使い方」が健康被害や依存につながる事例も報告されています。

このような状況の中で、薬剤師が果たす役割は極めて重要です。薬剤師は薬の専門家として、薬の正しい使い方を伝えるとともに、薬物乱用防止の啓発活動にも取り組んでいます。学校で実施される薬物乱用防止教室や講話は、児童生徒に正しい知識と判断力を育む貴重な機会となり、将来の健康意識を高めることにつながります。

薬剤師は、科学的な知識と生活に寄り添う姿勢をもって、子どもたちに「薬と上手に付き合う力」を育む支援を続けてまいりたいと考えています。

学校保健活動は、学校医、学校歯科医、学校薬剤師、養護教諭、教職員、そして保護者の皆様が連携して取り組むことが大切です。それぞれの専門性を生かし、子どもたちが心身ともに健やかに成長できる環境を築いていくことが、私たちに課せられた使命であります。

茨城県薬剤師会としても、環境衛生管理、感染症対策、薬物乱用防止の三本柱を中心に、学校保健の充実に全力で取り組んでまいります。未来を担う子どもたちが「安全で健やかに学べる学校」で日々を過ごせるよう、皆様の一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

## 令和7年度 茨城県学校保健会評議員会(総会)

令和7年度茨城県学校保健会評議員会(総会)が、6月26日(木)に茨城県メディカルセンター内茨城県医師会会議室に於いて、出席者(評議員・役員)35名で開催されました。

- 1 開会のことば 渡邊 剛 副会長
- 2 会長あいさつ 松崎 信夫 会長
- 3 来賓あいさつ 県教育庁学校教育部保健体育課  
高橋 清 課長

#### 4 報告及び協議

- (1)令和6年度事業並びに決算報告について
- (2)会計監査報告
- (3)役員改選について

会 長 松崎 信夫(県医師会長)  
副 会 長 城之内宏至(県医師会副会長)新任  
榊 正幸(県歯科医師会長)  
樗木 昭(県薬剤師会長)新任  
深谷 靖(県高等学校長協会会長)新任  
鈴木 宏一(県学校長会長)新任  
監 事 江原 孝郎(県医師会)  
鶴屋 誠人(県歯科医師会)  
渡邊 龍雄(県薬剤師会)新任  
山本 一典(県学校長会)新任

#### (4)退会役員感謝状贈呈(敬称略)

副 会 長 横濱 明  
渡邊 剛  
大芝 静香  
監 事 本多美知子  
平原 満  
常任理事 河合 光恵  
関谷 隆徳  
大越 聖之

#### (5)令和7年度事業計画(案)並びに予算(案)

#### (6)その他

協議された議事は、全員一致で承認されました。



#### 5 保健体育課からの行政説明

「学校における健康教育の動向について」

講師 県教育庁学校教育部保健体育課  
健康教育推進室 鳥羽 秀樹 室長

#### 6 閉会のことば 深谷 靖 副会長

#### 本年度の主な事業

##### 1 研修事業

- ・職域部会研修会・講習会 各部会で実施

##### 2 各種委員会

- ・会報編集委員会
- ・尿・心臓検診結果検討委員会
- ・保健統計作成検討委員会
- ・生活習慣病予防対策委員会
- ・ほう賞選考委員会
- ・医薬品及び資材審査委員会
- ・「全国健康づくり推進学校」推薦委員会

##### 3 各種大会

- ・第76回関東甲信越静学校保健大会  
8月7日(木) 千葉県千葉市
- ・令和7年度全国学校保健・安全研究大会  
11月20日(木)～21日(金) 神奈川県横浜市
- ・日本学校保健会事業報告会  
2月13日(金)東京都 オンデマンド

##### 4 その他

- ・茨城県学校保健・学校安全表彰式  
(県教育委員会と共催)  
2月予定



## 教育行政

## 健康教育の充実に向けて

茨城県教育庁学校教育部保健体育課 健康教育推進室長 鳥羽 秀樹



茨城県学校保健会の皆様には、日頃より本県の学校保健の充実に御尽力をいただき、厚くお礼申し上げます。

また、児童生徒の心身の健康管理や支援に多大なる御貢献をいただいておりますことにも、重ねて感謝申し上げます。

さて、学校における健康教育は、生涯を通じて自らの健康を適切に管理し、実践していく資質や能力を育成することを目指して実施されています。近年、疾病構造の変化や少子高齢化の進展など、児童生徒を取り巻く社会環境や生活環境が大きく変化してきており、健康教育は絶えず更新していくことが求められております。

そのため、本県では、様々な健康教育を行っておりますが、その中でも本県が長年取り組んでいる国委託の事業である「外部講師を活用したがん教育等現代的な健康課題理解増進事業」を御紹介させていただきます。

文部科学省は、平成26年度から「がん教育総合支援事業」という名称で「がん教育」に係る講演会の開催に講師を派遣する事業を始めるとともに、がん教育教材や外部講師の活用に関するガイドラインを作成し、長い間が

ん教育を推進してきました。令和6年度からは、事業の名称を「外部講師を活用したがん教育等現代的な健康課題理解増進事業」に変更し、がんだけでなく、様々な健康課題に関する講演会についても、講師を派遣することができるよう取組としています。

県におきましても、昨年度より、がん教育だけではなく現代的な健康課題に対しても、学校への要望に合わせて講師を派遣できるよう準備を進めてまいりました。その成果としまして、今年度は、小学校においては「自分の心の状態に合った適切な行動の仕方」、中学校においては「ＩＣＴ機器が心身に及ぼす影響」、高等学校においては「精神疾患への対処法」、それぞれに関する講演会を実施する予定となっております。

今年度開催された講演会の成果等を次年度に生かし、現代的な健康課題に関する講演会を継続して開催していくことで、さらに、児童生徒、保護者、先生方の力になれるよう事業を推進していきたいと考えております。

県としましては、このように児童生徒が直面する健康課題に柔軟に対応できるよう既存の事業のブラッシュアップを図り、健康教育の一層の充実に努めてまいりますので、引き続き皆様の御支援と御協力をお願いいたします。

## 処方箋

## 「多様性の時代において薬物乱用防止活動に必要なこと」

茨城県学校保健会 常任理事 関根 剛

多様性という言葉が使われだして久しいですね。

これを真っ向から否定している某国の大統領もいますが、私はとても大事な事だし、尊重したいと思っています。そんな私が最近困っているのが薬物乱用の多様化です。

私が学生の頃の薬物乱用と言えば、いわゆる違法薬物（麻薬や覚醒剤等）はその筋の方や一部の芸能人の世界のもので、一般的にはせいぜい不良少年（いわゆるツッパリ）がシンナーなどの有機溶剤を悪用する程度だったと記憶しています。

それが「合法ドラッグ」（現在の危険ドラッグ）が登場し、繁華街などで手軽に購入できるようになった頃から大きな広がりを見せ、その取り締まりが厳しくなると今度は大麻の乱用が広がりました。数々の大学での集団使用のニュースは記憶に新しいと思います。

更に最近では市販薬のオーバードーズ（OD）が社会問題となり、薬物乱用の裾野は大きく広がり、加えて低年齢化も進んでいる事に危機感を抱いております。

我々学校薬剤師は、以前から薬物乱用防止活動に積極的に取り組んでまいりました。

しかし昨今の変化により従来の「ダメ、ゼッタイ」的なスタンスだけでは不十分と考え、2年前にハームリダクションについて、そして本年はレジリエンスを育む視点について研修を実施したところです。

少子高齢化が進む日本において、これからは益々海外からの人材が活躍し共存する社会がくると考えると、私達が接する児童、生徒さん達も、多様な文化、宗教、習慣をバックボーンに持つ方も増えるでしょう。

もちろん、同じ日本人でも価値観や生活環境は人それぞれです。こうした多様性を理解、尊重し、薬物乱用の背景にある心理的な要因へのケアを実践するためには、私達自身が多様性を受け入れる寛容さ、柔軟性を身につける事が必要だと思います。

生徒さん一人一人にきちんと寄り添い、辛さを共有し、その上で一緒に考え、良い方向に導く事が出来る様に、研修を通して人間力を磨いていきたいと思っています。

一緒に取り組んでまいりましょう。

（茨城県薬剤師会学校薬剤師部会長）



いばらき被害者支援センター マスコット  
ソラちゃん

〈今、子どもたちは〉

あなたに知ってほしいこと

～犯罪被害者等の現状と支援について～

(公社) いばらき被害者支援センター 事務局長 森田 ひろみ

## 1. 犯罪被害とは

犯罪被害とは、ある日突然降りかかってくるものです。被害者等（犯罪被害者とそのご家族、ご遺族）は、被害に遭ったその時から「犯罪被害者」という名を本人の意に反して貼り付けられ、それを自分で取り去ることはできません。たとえ何年たったとしても、ネット上に残された事件・事故の情報は何時でも検索可能で、決して過去のモノとならないからです。

## 2. 犯罪被害者等の現状

犯罪被害により自分自身が傷ついたり、あるいは大事な人を亡くしたりという辛い体験（トラウマ体験）をすると、心も「ケガ」をします。この「心のケガ」を専門用語で「トラウマ」と言います。心がケガをすると「心と体の変化」「考え方・気分の変化」「行動の変化」が生じます。このような変化を専門用語で「トラウマ反応（トラウマ症状ということもあります）」と言います。

トラウマ反応には以下のようなことがあります。これら全てが生じる訳ではなく、また、被害者等に当てはまるものもあれば、当てはまらないものもあります。

### ①心と体の変化

不眠 悪夢 食欲不振 体調不良  
フラッシュバック 肩こり 胃痛 頭痛

### ②考え方・気分の変化

自責感 無力感 焦燥感 抑うつ  
過剰な警戒心 他者への不信感

### ③行動の変化

退行 被害を思い出すものを避ける  
学校や仕事に行けない リストカット

OD

このようなトラウマ反応自体は、異常なことではありません。犯罪被害のようなトラウマ体験に対する「正常な反応」です。

このようなトラウマ反応だけでなく、犯罪被害に遭うことにより、休職・退職をせざるを得ず、経済的な問題を抱えることもあります。また、周囲の心ない言葉に傷つき、孤立感をより深めることもあります。更に、これまで縁のなかった警察・検察庁、そして刑事裁判といった司法に関わることとなり、被害者等にのしかかる負担は計り知れません。

## 3. いばらき被害者支援センターの支援について

犯罪被害者とそのご家族を支援するために1995年に水戸市内に設立されたのが、(公社) いばらき被害者支援センターです。当センターは、茨城県公安委員会から「犯罪被害者等早期援助団体」の指定を受け、被害者支援を行う民間団体です。

当センターの主な支援内容は以下の通りです。面接・直接的支援は対応する罪種（故意による身体犯、性暴力被害、交通死亡事故など）が限定されています。

支援は全て無料で行っています。

### ①電話相談

電話回線は犯罪被害全般についての「いばらき被害者支援センター」と、性暴力被害に特化した「性暴力被害者サポートネットワーク茨城」の2回線があります。訓練を受けた相談員が対応します。先ずはお話をお聞きした上で、情報提供、他機関紹介などを行います。

## ②面接相談

電話相談の中から、状況に応じて面接相談へ移行します。水戸にあるセンターの面接室だけでなく、時には被害者のお近くの警察署や行政のお部屋をお借りして行うこともあります。心理士によるカウンセリングも行っています。

## ③直接的支援

警察・検察庁や病院（産婦人科や精神科等）、あるいは行政の窓口に行く際の付添い、刑事裁判を傍聴する際の付添い、刑事裁判に証人に出る際の付添いなど、被害者等と直接、お会いして行う支援です。刑事裁判を代わりに傍聴し報告する代理傍聴も行います。

2025年9月1日に、茨城県弁護士会と当センターは協定を結びました。月2回、弁護士会から弁護士が派遣されます。弁護士による電話や面接による法律相談も無料で受けることができます。

## 4. あなたに知ってほしいこと

一番大切なことは、犯罪被害の責任は、あくまでも加害者にあり、被害者等にはないということを皆さんに知っていただきたいのです。

被害者等は被害後、混乱していたり、体調不良により事件前と同じように行動したりすることが難しくなっていることもあります。しかし、「何もできない人」になった訳ではありません。人に

は回復する力がありますし、現在ではトラウマに有効な心理療法（PE療法<sup>※1</sup>、TF-CBT<sup>※2</sup>など）もあります。

被害者等が回復するには、被害の重さではなく、如何に周囲からのサポートが得られたかが重要です。特別な事ではありません。これまで通り、変わらずに接していただくことが大切です。

どうか被害者等のためにご支援いただきますよう、この場をお借りしてお願い申し上げます。

いばらき被害者支援センターは、被害者等だけでなく、その周囲の方々への支援も行っています。被害者等にどう接したらよいのかを一緒に考えるコンサルテーションも行っています。

まずは、いばらき被害者支援センターにご相談ください。

※1 持続エクスポージャー療法

※2 ト라우マフォーカスト認知行動療法

公益社団法人いばらき被害者支援センター HP  
のQRコード



どうしよう？とおもったら  
「いやだな」をいけつる本



こんなとき、どうする？  
知って、考える「犯罪被害者支援」

冊子の詳しい解説等は下記のURL、もしくは上記のQRコードからダウンロードできます。  
<https://www.nnvs.org/mangaguidance/>

# 令和7年度 全国学校保健・安全研究大会参加報告

茨城県学校保健会 事務局長 寺田 明彦

11月20日・21日の2日間、神奈川県横浜市において、令和7年度全国学校保健・安全研究大会が開催されました。「生涯を通じて、心豊かにたくましく生きる力を育む健康教育の推進～急速に変化する社会の中で、主体的に健康課題の解決に取り組む子供の育成～」を主題に、表彰式、記念講演、課題別研究協議会が行われました。



初日の午後からの表彰式では、今年度、本県から個人5名と小学校2校が文部科学大臣表彰を受賞しました。記念講演は、「現代的な健康課題の解決に向けた学校保健・安全の体制づくりをめざして」という演題で、横浜国立大学教育学部教授の物部博文先生の講演を拝聴しました。その中で、特に日本の児童生徒の死因に自殺が多いことを憂慮し、その対策として子供の幸福度を高くすること、保健教育では対話的学びを重視し納得する保健に視点を当てること、健康・学校に関わる人々が協働することが必要であるということが印象的でした。



2日目の課題別研究協議会は、10の課題に分かれて研究協議が行われ、午前の部の第3課題「心の健康」に参加しました。中学校におけるストレスマネジメントを取り入れた心の健康づくり、中等教育学校における生きる力を育む学習「こころとからだの時間（ここから）」の実践、小学校における心身の健康課題解決に向けた自己決定能力を育む教育活動の促進の三校の発表も大変参考となりました。



分科会講師である社会医療法人あさかホスピタルの水野雅文院長からは、特に精神疾患は若者の病気であり、その予防のためには社会性や社交性に関する教育、学校における地域の中でのネットワーク作り、心の健康観察のツール作りが大切であるとのことがありました。



また、午後は、全国学校保健会中央大会に参加しました。日本学校保健会事業報告及び全国ブロック学校保健会活動報告の後、国への要望事項等に関する協議を行いました。

1日半という短い日程でしたが、大変充実した内容の全国大会でした。



## あの時の学校保健委員会

茨城県歯科医師会 学校歯科医部会 櫻井 英人

現在、私は人生を半世紀以上過ごし、学校歯科医に初めて委嘱されて20年以上が経ちました。6年前から茨城県歯科医師会学校歯科委員会に所属させてもらっています。委員会等で先輩、同僚委員の方達と話す機会がある度に、自分の学校保健に対する取り組みはどうであろうかと考えます。

自分の学校歯科医としての職務を振り返る時に必ず思い出す事があります。それは、初めて学校歯科医として委嘱された小学校で組織された学校保健委員会です。私もまだ駆け出し歯科医で、歯科健診以外は受け身の姿勢でした。そのような中で保健委員会に初出席しました。第一歩になりますので、歯科健診の結果を踏まえて意見を述べられる準備をして参加しました。校長先生の挨拶で始まり肅々と会は進行してゆきます。最後に委員長の学校医の先生が締めて閉会となりました。

帰宅後に会を思い返しました。印象深く感じたのが養護教諭の先生的情熱、栄養士の先生の一生懸命、PTA

役員さんからの切実な相談でした。それに引き換え、私は通り一遍の発言であったと思いました。これからどのように学校保健委員会に参加してゆくか考えました。まずはPTAの方がせっかく学校保健委員になったのだから、委員会参加を有意義な時間だったと思える様にしたいと思いました。

近眼、肥満、虫歯に関する相談が多いので、私なりに調べ学校医の先生にも相談して楽しい雰囲気作りを目指しました。委員会の回を重ねるうちに、校長先生をはじめ委員全体で雑談を交えながら話し合う会になっていました。

最初はPTA役員の方に有意義な時間をと考えていましたが、私にとって有意義な時間になっていました。一つの議題、相談を委員みんなでディスカッションをすることがとても楽しく、私にとってあの時の学校保健委員会は忘れられない思い出になっています。

### 保 健 室

## 統合初年度の保健室から

大子町立大子中学校 養護教諭 槇 雅美

今年度、大子町では町内4つの中学校が統合され、新たに「大子中学校」がスタートしました。現在、町内各地から248名の生徒が通学しており、毎日6台のスクールバスが運行されています。

4月、新学期はまだ準備が整いきらない中で始まりました。私自身も異動直後で慌ただしい日々でしたが、先生方の支えを受けながら健康診断などを進めていました。

そんな中、5月の連休明けから保健室に来室する生徒が急増。「教室がうるさい」「人が多くて息苦しい」「休み時間も休めない」といった声が多く、涙を流す生徒もいました。大きな環境の変化に戸惑い、ストレスを感じている様子が伝わってきました。

しかし、行事や部活動を通して交流が深まるにつれ、少しずつ緊張がほぐれ、学校のあちこちで自然

な笑顔が見られるようになりました。現在、保健室の利用者は1日平均10名ほど。小学校勤務が長かった私にとっては、令和の中学生の姿に驚かされる毎日です。

スマートフォンの長時間利用、SNSトラブル、生活リズムの乱れによる心身の不調など、現代的な健康課題にどう向き合うか、日々模索しています。

振り返れば、私自身も手探りで過ごした1学期でしたが、この4校統合初年度に立ち会えたのも何かのご縁。職員同士のつながりを大切にしながら、時には優しく、時には厳しく、そして時にはそっと生徒の背中を押せるような保健室経営を目指していきたいと思っています。

## 研究室

# 自分の健康に関心をもち、進んで健康づくりに取り組む児童の育成 ～感染症流行をきっかけとして増加した健康課題を解決する取組を通して～

北茨城市立精華小学校 校長 小野 政美

## 1 学校紹介

本校は、茨城県最北端にある北茨城市の中心部に位置し、児童数399名の中規模校で童謡詩人野口雨情の母校でもある。学校の近くには、高速道路のインターチェンジや駅があり、商業施設や交通量が多い一方で、西の阿武隈高地から流れる河川には、オオハクチョウが飛来するなど、自然豊かな環境である。保護者や地域に見守られ、明るく素直で落ち着いた態度で学習に取り組む児童が多い。保護者は学校教育への関心が高く、協力的である。

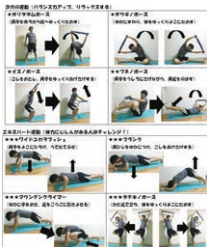
## 2 学校経営方針と健康づくり

学校は「よく学び よく遊び 自分を大切にできる精華の子」を目標とし、保健・給食・体育部が連携し健康教育「丈夫な身体づくりに励み、元気に生活できる子の育成」を組織的に進めている。しかし、コロナ禍以降、体力の低下に加え、視力1.0未満、う歯、肥満傾向が増加し、休校明けには骨折も多発した。これは家庭でのスクリーンタイム増加の影響とみられる。この課題を受け、学校は行動制限下でも自分の健康に関心をもち、進んで健康づくりに取り組む児童を育てるため、令和2年度から継続的に健康教育を推進している。

## 3 健康づくりの実践

### (1) フィットネスカード、ストレッチカード（体育部）

休校中の運動不足とスクリーンタイム増加、および休校明けのけが多発を受け、「フィットネスカード」を作成し、家庭での運動を促した。けが予防のための柔軟性に着目し、休校後も「ストレッチカード」をカレンダー形式で長期休業中に配付し継続させた。これにより、児童の運動はウォーキングだけでなく、ストレッチも選択肢に加わり、運動の幅が広がった。



### (2) 食に関する指導（給食部）

給食を生きた教材とし、日常的に担任が献立表に基づき栄養素や働きを説明している。また、毎月19日の「食育の日」には、栄養教諭が資料提供や合同指導を実施した。この継続的な取り組みの結果、児童に食への関心が高まり、「好き嫌いをなく食べる」「よくかんで食べる」といった食意識の向上が見られた。

### (3) 歯科保健指導（保健部）

コロナ禍で中断していた歯垢染め出し指導を、令和5年度に学校歯科医と相談し再開した。歯科衛生士4名の派遣を受け、児童は個別の歯並びに合わせた磨き方を丁寧に学んだ。赤く染まった歯を見て意識が高まり、熱心に歯を磨く姿が見られた。指導後、給食後の歯みがきでは、小さく動かす・縦磨きをするなど、児童の磨き方に変容が見られた。



### (4) デジタル・シティズンシップ（情報モラル）教室（保健部・生徒指導部）

デジタル機器の接触時間増加による視力・姿勢への懸念から、保健部と生徒指導部の共催でデジタル・シティズンシップ教室を実施した。外部の認定講師を招き、「使わない」ではなく「上手な付き合い方」を学

ばせるよう内容を調整した。児童にとって身近な事例を通して、デジタル機器との付き合い方を考えさせた。児童は、ゲームのやめ時や文字での誤解を防ぐ方法など、自身の生活を振り返り真剣に考えていた。

### (5) ミニ保健指導（保健部）

長期休業明けの身体測定時に、養護教諭が保健指導を行っている。以前は、けがで来室する児童の傷口が汚いことが多かったため、けがの手当てに関するミニ保健指導を実施した。その結果、児童の行動が変容し、傷口を水で洗ってから保健室に来る行動が継続されている。ミニ保健指導が児童の行動変容に効果的だったことがうかがえる。

### (6) 職員研修（保健部）

教職員が一体となった安全教育にするため、共通理解と協働を基盤とした職員研修を実施している。職員会議等でのミニ研修の他、心肺蘇生法や3年間のプランクがあった水泳学習への対応は、時間を確保し繰り返し研修を行った。また、救急搬送発生時は、すぐに状況をまとめて関係者の反省を集約し、対応改善に活用している。

### (7) 児童会の活動（特活部）

児童会活動では、計画委員会が「M（みんなで）S（静かに）A（歩こう）キャンペーン」で校内のけが防止に取り組み、保健委員会が「生活調べ」で生活習慣の改善を促している。「生活調べ」では、朝食や歯みがきなど生活習慣を全校で確認し、高い関心を集めた。また、ハンカチ所持が課題の児童には、養護教諭が個別面談と継続的な声かけを実施した。その結果、児童は自発的にハンカチを用意できるようになり、達成感に満ちた行動変容が見られた。

### (8) 家庭・地域等との連携

「健康チャレンジカード」を活用し、家庭でも健康づくりに取り組めるよう支援した。児童は自分で目標を設定し、保護者からも好意的な反応が得られた。

## 4 まとめ

「フィットネス・ストレッチカード」の導入は、苦手意識のある児童の運動の幅を広げた。また、歯垢染め出し指導やミニ保健指導により、児童は給食後の丁寧な歯みがきや、けがの際の傷口洗浄といった行動の変容が見られた。感染症流行をきっかけとして増加した健康課題を解決するためのこれらの取組を通して、自分の健康に関心をもち、進んで健康づくりに取り組む児童の姿が多く見られるようになった。その結果、視力1.0未満、う歯保有者、骨折件数は令和3年度をピークに減少した。今後も、全職員が一体となって健康づくりを推進し、自分の健康に関心をもち、進んで健康づくりに取り組む児童の育成を目指していきたい。

(文責 養護教諭 鈴木 睦)

## 研究室

# 危険を予測し、積極的に命や安全を守ることができる児童の育成 ～中学校区内の学校間、地域、関係機関との連携・協働を通して～

土浦市立上大津東小学校 校長 飯田 千枝美

## 1 学校紹介

本校は、霞ヶ浦西端の高台に位置し、児童数352名の中規模校である。学校教育目標「自ら学び、心豊かでたくましい児童の育成」を目指し、日々の教育活動を展開している。安全教育においても、学校と家庭、地域との連携を通して、自らの健康・安全を守ることができる子どもの育成に取り組んでいる。

## 2 具体的な取組

### (1) 教科等横断的・総合的なカリキュラム編成

①中学校区3小学校1中学校が連携して学校安全計画の改訂を行い、学校間共有をしている。また、令和5年度から、全学年の協力の下、教科等横断的な学校安全計画に改訂を行った。具体的には、安全学習の欄に、それぞれの学年に応じ、「生活」「理科」「社会」「図工」「家庭」「体育」「総合的な学習の時間」の項目を新たに加え、各学年の安全に関する学習を記載した。

②発達段階に応じた危険予測トレーニング(KYT)を実施している。

今年度の学校安全計画の改訂では、全学年で実施する危険予測トレーニングの取組を安全指導の中に位置付けた。教科横断的な計画になったことで、学習内容がより明確になり、計画の改定立案がしやすくなった。

### (2) 持続可能な地域連携体制の再構築

#### ①学校運営協議会との協力体制の構築

学校運営協議会への協力依頼内容を明確にした。委員からは「各地区に消防団組織があるため、学校・地域・行政・関係機関との連携がとりやすい」「防災教育・安全教育への協力は、単年度の協力ではなく、今後も持続していきやすい内容である」などの前向きな感想が多く寄せられ、地域との連携体制づくりにつながっている。

#### ②地域との連携と校外学習・出前授業の実践

本校の地域連携についても、学校運営協議会の協力が大きな役割を果たしている。多くの委員から人材バンク作成の必要があるとの意見が出された。そこで、新たにスクールボランティアを募集した。保護者への通知、学校便り、地域回覧板、学校運営協議会委員による呼びかけなどで協力者を募り20名程の人材



バンクを立ち上げることができた。現在も、その拡大を図っているところである。安全教育に関する校外学習及び出前授業については、教科等横断的な学校安全計画の中に位置づけ、市役所、警察署、消防署等と連携した学習を毎年実施できる体制を構築した。理科では、建設技術研究所において土砂災害や河川氾濫の科学実験を行い、自然災害への理解を深めた。

### ③中学校区における学校間連携

本校は、施設分離型小中一貫校として、中学校区の小中学校4校が連携し、共通のグランドデザインのもと、教育活動を行っている。特に、健康教育においては、「心と体の育成」部会で、9年間を見通した学校安全計画の共有、小中の発達段階に応じた段階的な安全教室の実施、中学校区での合同避難訓練の実施、中学校区共通の安全マップの共有を行い、小中一貫で安全教育を推進する体制を整えることができています。

### (3) 危険を予測し、積極的に命や安全を守る行動がとれる児童の育成

#### ①危険予測トレーニングの成果

全学年において発達段階に応じた危険予測トレーニングを行った後、授業評価アンケートを実施した。その結果、すべての学年で肯定的な回答を得ることができ、楽しく学べるとともに、児童が役に立つと感じられる授業となっていることが分かった。

#### ②児童の防災意識の変化

防災意識に関するアンケートを実施した。調査の結果、「災害に対する自己効力感」「災害に対応するための知識・理解」「災害に関する家族との共通理解」「災害への具体的な備え」のすべての項目で、実施前よりも実施後の肯定的評価が上回り、実践が効果的であったことが示された。

## 3 まとめ

今回の取組では、小中の学校間連携を図りながら、教科等横断的・総合的なカリキュラム編成を行うこと、持続可能な地域連携体制を再構築し、意図的・計画的・継続的な安全に関する教育を進めること、さらに、危険を予測し、積極的に命や安全を守る行動がとれる児童を育てることをねらいとした。上記の通り、「学校安全計画の改訂」「持続可能な地域連携体制の再構築」については、概ね達成できたものとする。また、「危険を予測し、積極的に命や安全を守る行動がとれる児童を育てる」ことについても、成果の検証がさらに必要ではあるものの、防災教育、安全教育の指導において、良好な結果を得ることができた。今後も、学校、家庭、地域、関係機関などで課題・情報を共有し、方向性を明確にして安全教育を進めていきたい。

(文責 教頭 仲谷 一洋)

## 学校現場から

## 「聞こえていないのかも？子どもの行動から見える難聴」

茨城県メディカルセンター総合検診室 聴覚部門 技佐 言語聴覚士 小室 久美子

難聴は周囲から気づかれにくい障がいで、聴こえ方にはさまざまなタイプや程度があります。特定の音が聞こえにくい、言葉の聞き取りが困難などの症状により、「聞こえているのに返事をしない」と誤解されることもあり、発達障害との判別が難しい場合もあります。

新生児期の聴覚スクリーニングにより早期発見・療育が可能になりましたが、中耳炎や進行性の難聴など後天的に難聴が発症するケースや、スクリーニングを通過してしまう聴力型も存在します。「後方から静かに声をかけても反応がないが、少し大きめの声には気づく」「集団生活の中で行動がワテンボ遅れる」「本人以外の名前を呼んでも振り向く」「周囲の様子を見て行動している」といった様子から、先生が異変に気づき、難聴が判明した事例が現在もあります。

学校での聴力検査も、軽度の中耳炎から補聴器が必要な例まで、発見するきっかけの一つです。当センターでは「確実に聞こえる音に確実な反応があるか」を確認しながら検査を進めています。日常会話の音量（50～70dB程度）であれば耳への負担はほとんどありませんので、日常会話が成り立つのに検査が成立しないときに

は、このくらいの音量で反応があるのか、周波数を変えながら、様子を見ることもあります。

茨城県メディカルセンターでは、新生児から高齢者まで、年齢や発達に応じた聴力検査や補聴器の相談・指導を行っています。紹介状がなくても直接ご相談いただけますので、気になることがあればお気軽にお問い合わせください。

## ★小室先生にメディカルセンターでのお仕事について伺いました。

言語聴覚士として、特に「聴覚」に関する支援を専門に活動しています。乳幼児から高齢者まで、難聴や聴覚情報処理の課題のある方々に、聴力評価や補聴器・人工内耳などを行っています。



医療機関を拠点に、地域の教育機関や保護者と連携し、早期発見・早期指導に力を入れています。聴こえの課題を持つ、一人ひとりの生活背景に寄り添った支援を心がけています。

## き ら り

## 「心肺停止者の救命率向上を願って」

茨城県立下妻第一高等学校 養護教諭 那須 由美子

この夏、救急法講習会を下妻第一高校で、受講を希望する生徒を対象に行いました。茨城県に採用されたその年から指導に携わっています。

高校生の時に日本赤十字社救急法救急員、20歳の時に日本赤十字社救急法指導員の資格を取得しておきました。養護教諭が教えて、資格も取れる、何とも魅力的なこの講習に、多くの生徒、時には先生方も受講してくださいました。この活動は、養護教諭が教育職であることを人々へ伝えることに寄与したものだと思います。

指導員資格を継続することで、救急技術の訓練と新しい知識や技術を得ることができ、5名的心肺停止事案に対処することができました。この場をお借りしまして、日本赤十字社茨城県支部の皆様、折笠先生、永井烈先生、指導員の皆様に御礼を申し上げます。ありがとうございます。

平成4年11月、茨城教育会館大ホールにて「DOA対策緊急大集会」が茨城県・県教育委員会・県警察本部共催のもとに開かれました。DOA（来院時心肺停止状態）患者の救命率は当時、日本では2%、海外では40～50%であるとの、秦病院長の渡辺晃先生のお話を伺いました。

令和7年現在の心肺停止者の救命率は、総務省消防庁発表の『令和6年度版消防白書』によると、令和5年（平成35年）に於いて、一般市民による心肺蘇生法が行われた場合の1カ月後生存率は11.8%、1カ月後社会復帰率は7.4%となっています。

心肺蘇生法が、一部の人だけのものだった昭和の時代から紆余曲折を経て、多くの市民に開かれたものになりつつある現在、蘇生法普及にご尽力くださいました多くの方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 第76回関東甲信越静学校保健大会参加報告

茨城県立水戸第三高等学校 養護教諭 西田 晃代

令和7年8月7日、千葉県にて第76回関東甲信越静学校保健大会が参集型（後日アーカイブ配信あり）で開催されました。本大会は「豊かな心と健やかな体を育むウェルビーイングの向上を目指して」を主題に、特別講演と班別研究協議会が行われました。

特別講演では「車いすになってよかった」という演題で、東京2020パラリンピックおよびパリ2024パラリンピック銅メダリストの村山浩氏（SMBCグリーンサービス株式会社 東日本人事部所属）のご講演を拝聴しました。

村山氏は突然の病気の発症、車いすでの生活を余儀なくされた当初の現実を受け入れられない心情、長期にわたる入退院に伴う休職や退職、疾病障害の受容、そして車いすバドミントンとの出会いによる新たな目標の獲得とパラリンピックへの挑戦に至るまでの当時の心の機微を、惜しみなくお話しくださいました。すぐには受け入れ難い現実と直面しながらも、ご自身の気持ちを取り戻す過程においては、ご家族の言葉や存在が大きな支えとなったというお話が特に印象的でした。

午後の班別研究協議会では、①学校経営と学校保健、②健康教育、③いのちの教育（性に関する指導・がん教育）、④学校歯科保健、⑤学校環境衛生と安全教育の5つの班に分かれ、班ごとに提案された2校の実践について、協議が行われました。

て、協議が行われました。

健康教育班では、高萩市立東小学校の野田瑞穂先生から「自分の健康に関心を持ち、進んで健康づくりに取り組む児童の育成」について実践提案がありました。感染症流行時に顕著となった児童の体力低下や健康問題に対し多角的に取り組まれた実践で、具体的には天候に応じた活動場所の提供、外部講師による情報モラル教室、タイミングを見定めたミニ保健指導、保護者向けの講話会、ニーズに合った職員研修の実施など、多様な教育活動の中で展開されていました。野田先生からは、子ども達に「今」必要なものが何かを焦点化することが、学校全体で共通の課題意識をもつコツであるとの、校内組織の連携を円滑に進めるための具体的な参考となりました。

研究協議会では、指導助言者の長岡知准教授（順天堂大学）より、これからの健康教育の視点としてヘルスプロモーションスクールや主観的健康観、EBM（根拠に基づく医療）、NBM（物語に基づく医療）といったキーワードについてご教示いただきました。また、フロアには「学校におけるWell beingとは何か」という問いが投げかけられ、隣席の先生方と意見を交換する時間も設けられました。近隣都県の学校保健を真剣に考える方々とお会いできたことで、多くの知見や刺激を得ることができ、大変充実した研修となりました。

## 受賞おめでとうございます

本県から次の方々が文部科学大臣賞を受賞されました。（敬称略）

### 《学校保健表彰》

#### ○個人

元 古河市立古河第七小学校

学校医 小林 賢二

水戸市立笠原小学校

学校薬剤師 庄司 幸枝

桜川市立岩瀬東中学校

学校医 袖山 巳恵子

古河市立古河第一小学校

学校歯科医 橋本 正一

#### ○学校

北茨城市立精華小学校

### 《学校安全表彰》

#### ○個人

茨城県立日立北高等学校

学校長 清水 秀一

#### ○学校

土浦市立上大津東小学校



本県から次の方々が日本薬剤師会学校薬剤師活動協力者として感謝状が贈呈されました。（敬称略）

茨城県保健医療部疾病対策課

係長 深津 法子

笠間市立稲田中学校

養護教諭 権田 多美子

## 健 ～すこやかに～

食を通して、子どもたちにもっと寄り添うために  
—第2回全国学校給食・栄養教諭等研究協議大会に参加して—

つくば市立吾妻小学校 栄養教諭 中村 美智子

標記全国大会が8月5日、6日に水戸市で開催されました。この大会は、食育の推進や学校給食の充実と、栄養教諭・学校栄養職員の資質向上を目的に、全国から関係者が集まり、それぞれの現場の実践や課題について学ぶものです。

近年、児童生徒の“食”に関する悩みや課題も多様化しており、食物アレルギーや肥満、偏食など様々です。「個別的な相談指導の在り方」をテーマにした第4分科会では、そうした一人一人の状況に合わせた個別的な相談に取り組むための校内組織や連携体制の在り方についての協議が行われました。

食に関する課題に丁寧に向き合うためには、一人の職員の力では限界があり、学校全体での体制づくりが不可欠だと感じています。子どもに一番近い担任や養護教諭の先生方、そして、学校医の先生方や校内の先生方、栄養教諭が連携し、それぞれの視点を出し合うことで、子どもにとって最も適切な指導や支援の形が

見えてくることがあります。

その中で、栄養教諭として私が担う役割は、「食」を入りに、子どもの状態を把握し、相談や支援につなげていくことだと思っています。

個別的な相談指導は、特別なことではなく、日々の中での「気づき」や「ちょっとした声かけ」から始まる場合があります。そして、その気づきを「こんなことがあったよ」と職員間で共有しながら少しずつ積み重ねていくことが重要であると思います。私自身も、給食の様子やちょっとした会話から気になる子を見つけることがあります。「自分ひとりではなく、みんなで見守っていく」という安心感が、子どもにとっても、私たち大人にとっても、大切なことではないでしょうか。

これからも、子どもたちの“食”と“心”に寄り添えるように、校内の先生方とつながりながら、一步步実践を重ねていきたいと思っています。

## 事務局だより

◎ 令和6年度 日本学校保健会「全国健康づくり推進学校表彰」

【優良校】 ○北茨城市立精華小学校  
○土浦市立上大津東小学校

◎ 令和7年度 茨城県学校保健会「全国健康づくり推進学校表彰」

【最優秀校】 ○神栖市立波崎第四中学校

日本学校保健会「全国健康づくり推進学校表彰」に推薦いたしました。

編集  
後記

本年度の会報「学校保健」（第69巻）をお届けします。

茨城県学校保健会は、学校保健の研究、普及、発展を図ることを目的として組織され、この会報誌もその目的のために、皆様に最新の情報をお届けできるよう作成しています。

県内には、様々なお立場で学校保健を支えてくださっている方が、たくさん活躍されています。今回も児童、生徒の健やかな成長を願って取り組んでいらっしゃる素晴らしい実践や、学校保健に対する熱い思いを、紙面を通して

皆様にお伝えすることでできました。

この会報誌が皆様の執務の参考や励ましとなりましたら、幸いに存じます。ご多用の中、玉稿を賜りました皆様方に、編集委員一同、心から厚く御礼申し上げます。

## 会報編集委員

瓜連小 砂押 敦子	前渡小 遠藤 愛美
国田義務教育学校 黒澤 美香	舟石川小 高橋 雅子
下稲吉中 成島ひろ子	水戸聾学校 古橋 友莉
事務局 寺田 明彦	事務局 片山美千恵